

さあ、劇場へ出かけよう。

フェニーチ工場

FENICE SACAY



©一色 美奈保

巻頭特集

有終の美！

「ロンドン交響楽団 日本ツアー2022」

指揮者サー・サイモンラトル インタビュー

観覧エッセイ 澤田瞳子（直木賞作家）「音楽を浴びる」

2022
vol.19



卷頭特集 有終の美! 「ロンドン交響楽団 日本ツアー2022」

サー・サイモン・ラトル氏(指揮者)&
キャサリン・マクダウェル氏(ロンドン交響楽団マネージング・ディレクター)
WEBインタビュー



サー・サイモン・ラトル氏 キャサリン・マクダウェル氏

16年にわたってベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者と芸術監督を勤め、2017年からロンドン交響楽団の音楽監督に就任、その多彩な表現力や若い世代への音楽教育でクラシック界に搖るぎない地位を築き上げたサー・サイモン・ラトル。名誉総裁にエリザベス女王を戴く「女王陛下のオーケストラ」として知られ、120年にせまる長い歴史を持ち、世界有数の名門と称されるロンドン交響楽団。世界最高峰の指揮者と現代を代表する演奏家たちが5年の歳月をかけて磨いてきた珠玉のハーモニーが、この秋、堺を歓喜の渦に巻き込みます。

ロンドン交響楽団での5年間で成し遂げたことは?との問いに、「カラヤン(20世紀を代表する指揮者)がいったように、庭園にしっかりと水をやること。雑草は抜く必要があるが、とにかく緑を生やし、それが華やかに花を咲かすようにしよう。そのように考えて指揮をしてきた。このオーケストラは素晴らしい、柔軟性に富んでいる。私が足せるのは音の深みをさらに出すこと。素晴らしい鳥がいたら、少し羽根を増やす。そして色の深みを増すこと。それができていればと思う」と、詩的な表現で口火を切ったラトル氏。
「私のキャリアで、これほど日本から離れていたことはない。コロナ禍で日本に行けなくて、どれほどさみしく思っていたか。日本のお客さんと築き上げてきたつながりは特別なものだと再認識した。今回は幅のある多様性のあるプログラムを持っていくことができ、また皆さんとつながれることをうれしく思う」と、ロンドン交響楽団との最後のツアーを展望しました。

フェニーチェ堺で演奏するプログラムについて

『皆さんにはロンドン交響楽団の多様性を聞いてもらいたいと思っている。たとえばシベリウスの「交響曲第7番」とバルトークの「中国の不思議な役人」組曲は同じ年に書かれた作品だが、音楽は非常に違っている。個人的には大好きなフランス音楽をプログラムに入れたいと考えており、フランスの影響を受けた日本の作曲家で、私の古き良き友人である武満徹の作品を日本で演奏したいと長年思っていた。今回はトロンボーン協奏曲(武満徹「ファンタズマ・カントスⅡ」)を、ピーター・ムーアという素晴らしい奏者が演奏する。これは私にとっては非常に意味がある。というのも、武満はジャズの影響を非常に受けている、彼がいつも聴いてい

たのがジャック・ティーガーというトロンボーン奏者。実は私の父も大好きで、私自身もこどもの頃から聴いて育った。武満が遺した唯一のトロンボーンコンチェルトでは、楽器が歌手のように美しいアリアを奏でる。このような素晴らしい作品を日本に持っていくこと、古い友人の作品を皆さんに聴いていただけるのを今から楽しみにしている。』(ラトル氏)

ロンドン交響楽団も例外なく巻き込まれたコロナ禍について、それまでリハーサルや教育に使用していたLSOセントルース(旧セントルース教会)を改装し、スタジオを作ったことを明らかにしたラトル氏とマクダウェル氏。外に出られない人や海外の人とつながる必要性を感じ、いち早くストリーミング配信を始めたことで世界を広げることができ、今まで演奏しなかったレパートリーに挑戦することにもなったといいます。

『長いあいだ生の音のブランクがあったおかげで、感謝の気持ちがかけがえのないものになった。パンデミックの期間はスタッフの創造性や柔軟性を使って、どうやって音楽を伝えるのか考えた。音楽家をどうやってサポートするかも考えなければいけなかった。この1年でヨーロッパを回ることはできたけれど、今回の日本ツアーはアジアに久々に戻るツアー。日本のあとには韓国とオーストラリアがひかえており、非常に大きなシーズンが私たちを待ち構えている。日本の皆さんは世界最高の観客といわれている。とにかく熱心に聴いてくれる。熱意のある日本の皆さんに会えるのを楽しみにしている。』(マクダウェル氏)

日本の文化で興味のあることは?

『オーケストラを代表していると思うが、とにかく日本食が楽しみだ。この数年間はおいしい日本食を食べることができず、みんな本当にがっかりしていた。お気に入りのレストランがまだ開いているのか、みんなで話しているよ。日本の文化は私の人生にいつも存在しているので、時間があれば歌舞伎を見に行ったりもしたいと思う。』(ラトル氏)

『今年が特別なのは、近年は訪れることができなかつた都市に行けること。ロンドン交響楽団は1960年代初頭から日本を訪れており、オーケストラの遺伝子に組み込まれている国。みんなとにかく、訪日を楽しみにしている。』(マクダウェル氏)

CLASSIC
大ホール

ロンドン交響楽団 日本ツアー2022 10月1日(土) 開演16:00



©Oliver Helbig

並々ならぬ意欲でラストツアーに臨む、サー・サイモン・ラトルとロンドン交響楽団。
ラトルの音楽監督退任を目前に試練の時期を過ごしたからこそその集大成に、ぜひご期待ください。

【指揮】サー・サイモン・ラトル

【管弦楽】ロンドン交響楽団

【曲目】ベルリオーズ:序曲「海賊」op.21

武満徹:ファンタズマ・カントスⅡ(トロンボーン:ピーター・ムーア)

ラヴェル:ラ・ヴァルス

シベリウス:交響曲第7番 ハ長調 op.105

バルトーク:バレエ「中国の不思議な役人」組曲

好評発売中

SS席23,000円 残りわずか S席19,000円 A席17,000円 B席15,000円 C席 **SOLD OUT**

主催:フェニーチェ堺 協賛:三共生興株式会社 後援:プリティッシュ・カウンシル



©Mark Allan



●掲載情報は
7月10日現在



ペンと劇場

音楽を浴びる 作家 澤田瞳子

大和証券グループ Presents

佐渡裕(指揮)/反田恭平(ピアノ)

新日本フィルハーモニー交響楽団50周年記念演奏会



6月1日公演

降り注ぐ音をただただ全身に浴びた。新日本フィルハーモニー交響楽団五十周年記念演奏会。指揮は佐渡裕氏、ピアノは昨年、ショパン国際ピアノコンクールで日本人としては五十一年ぶりの二位受賞を果たした反田恭平氏という、クラシック音楽界に詳しくない私でも存じ上げている錚々たる顔ぶれだ。

まず絢爛なピアノの独奏に、あっという間に手足を絡め取られる。あれよあれよという間に「皇帝」の異名にふさわしい晴れやかな音の渦に飲み込まれ、そこからは美しいオーケストラの音色を全身に受け続けるばかり。

失礼ながらクラシック音楽といえば、一般的に堅苦しいとの印象を持たれがちな芸術の一つだ。わたし自身、大学時代から能楽に親しみ、「能楽を見に行くには、着物じゃないとダメなんでしょう?」「いえ、ジーンズのお客さんもいっぱいおいでです」というやり取りを幾度も続けてきただけに、実際のコンサートにおける現実とイメージの不均衡はよくわかる。何の芸術にしたところで、実際の演奏に必要なマナーはたった一つ。ただ目の前に演じられる芸術を、ただ純粹に楽しむことだけだ。

この日、わたしの視界に映るお客様たちはみなただ音楽を楽しむばかりではなく、ホールに満ちる圧倒的な音に身をさらすことを、心から喜んでいるように見えた。勇壮で、それでいて繊細な音の一つ一つに身を委ね、小さく体を揺らしていらっしゃる方も大勢いた。かくいう私もその一人だ。くるくると傘を回して降る雨とたわむれるように、ついつい体がリズムに応えようとする。

音楽は洋の東西を問わず大好きだ。とはいえるコンサートに足を運ぶことは滅多なく、せいぜい時々、クラシックに詳しい友人お勧めのCDを買うばかり。だが、そんなこれまでを今回ほど残念に思ったことはない。それほどに降り注ぐ音に体を晒し、美しい音色を全身で浴びる今回の経験は快感であった。

古代ギリシアに生きた天才数学者・ピタゴラスは、音程が整数比によって説明できることを発見し、宇宙や人間は音楽、そして数の調和の中に生きていると考えた。現在、「和声」^{※注1}の意味で用いられる「ハーモニー(ハルモニア)」はここにおいて音楽の根底を成す「調和」として捉えられた。一方で古代中国を中心とする東アジア儒家文化圏では、音楽は君子^{※注2}の治める徳目^{※注3}の一つであり、人の世の平穡や人間自身にも通じる理念と考えられていた。古い時代に、音楽が洋の東西ともに人間そのものと深く関わるものと考えられていたのは興味深い。そして今回、音楽を電子機器が奏でる音ではなく、今まさに奏者によって生み出されたばかりの振動として感じ、個々の楽器たちの織り成すハーモニーを体で浴びてみれば、我々の心身を否応なしに突き動かす音楽の力を感じずにはいられない。

「皇帝」に続いて奏されたのは、同じくベートーヴェンの「交響曲 第七番」。映画「英国王室のスピーチ」をはじめ、様々なドラマ・映画、はたまたCMにも用いられてきた人気曲だけに、曲そのものには馴染みがある。しかし奏でられる端から夢く消えていく生の演奏を、全身で浴びる贅沢はそんな既視感をたやすく吹き飛ばし、あっという間に会場全体を今この瞬間しか味わえぬ一瞬の喜びの中に引きずり込む。

帰り道の電車の中で、会場で配布されていたリーフレットをめぐり、今度はどんな音楽を聴きに来ようかと計画を巡らせる。そんな心のはずみが漏れたかのように、つま先が小さく弾み、聞いたばかりのリズムを体の奥底から蘇らせた。

※注1 和声… 音楽で、和音の連なり。リズム・旋律とともに音楽の3要素の1つ。ハーモニーの訳語。

※注2 君子…学識、人格とともにすぐれた立派な人。人格者。高位、高官の人。

※注3 徳目…徳を分類した細目。儒家における仁・義・礼・智・信や古代ギリシャでの知恵・勇気・正義・節制、キリスト教における信仰・希望・愛など。



恋ふらむ鳥は

澤田瞳子 作 毎日新聞出版 本体2,000円+税 好評発売中

時は7世紀。飛鳥の世に生きた一人の女、額田王は子まで成した大海人王子と別れ、その兄、葛城王子の仕切る宮城で宮人として勤めに邁進する。誰かの妻や母としてではなく、一人の人間、歌詠みとして生きる道を模索するも、葛城の死、大海人の挙兵で運命は一転する。白村江の大敗、叔父と甥が争う壬申の乱……。動乱の飛鳥の世を生き抜いた万葉の歌人・額田王の激動の半生を鮮やかな筆致で織り上げた傑作歴史長編。

澤田瞳子(さわだ・とうこ)

1977年、京都府生まれ。同志社大学文学部卒業、同大学院博士前期課程修了。2011年、デビュー作『孤鷹の天』で中山義秀文学賞を受賞。13年『満つる月の如し 仏師・定朝』で本屋が選ぶ時代小説大賞2012ならびに新田次郎文学賞を、16年『若冲』で親鸞賞を、20年『駆け入りの寺』で舟橋聖一文学賞を、21年『星落ちて、なお』で直木賞をそれぞれ受賞。近著に『輝山』『漆花ひとつ』がある。



府営浜寺公園は、大浜公園より6年前に開園し、明治30年(1897)頃から南海鉄道が積極的な開発を始め、「堺市営の大浜公園」と「大阪府営の浜寺公園」とで客を奪い合う状況が生まれていました。そのような状況下で、博覧会閉幕後、大浜公園の水族館の来場者が激減しました。

明治38年(1905)夏、堺市はこの危機的状況の打破のため、大浜公園の整備と拡張を行い、庭園に堺商品陳列所を設け、翌年には水族館の無料開放を実施。また拡張した土地を、その後は使用料を徴収するというミラクルな案で、状況は持ち直したかと思われた矢先、明治42年川芳楼を火元とする大火のため、遊客が浜寺に流れ、大浜公園は再び大ピンチに陥りました。

そんな中、颯爽と現れたのが、明治43年(1910)に設立された阪堺電車です。設立後すぐに、堺市に大浜公園の開発参入の申請をしました。しかし浜寺公園を開発していた南海電車も競って参入申請をしたため、當時の斎藤研一(堺市長)が、2社共に開発としてまとめましたが、南海電車がこれに反対するという形で契約を結ぶことになりました。今はグループ会社である南海鉄道と阪堺電車ですが、当時は2社が競合関係にありましたため、堺市主導で大浜公園の開発を行い、子供運動場、菊人形館(龍宮殿)、大浜少女歌劇団と劇場を新設し、大正15年(1926)に、すべての経営から外れるまで大浜公園の発展に貢献しました。

その後阪堺電車は、計画案に沿って次々と開発を行いますが、公共性の高い公園拡充を求める堺市と、会社として利益を生み出さなければいけない阪

電車の間で、経営方針に少しずれが生じてきました。

堺水族館の歴史



内国勧業博覧会の閉幕後、堺市は水族館の払い下げを受け、あらためて市営の「堺水族館」としてオープンさせました。堺水族館は当時最高水準の施設内容を誇り、遠方からも来訪者が押し寄せました。昭和9年(1934)の室戸台風による高潮の被害で水族館は大破、さらにその修繕中に火事で全焼しましたが、昭和12年(1937)に見事に再建され、「東洋一の水族館」として再び大人気施設となりました。終戦後の昭和28年(1953)には水族館の大規模な改装を行い、かつてにぎわいを取り戻しましたが、昭和32年(1957)から始まった臨海工業地帯造成により、美しい砂浜がなくなると客足は遠のき、昭和36年(1961)に残念ながら水族館は閉鎖されました。

大浜潮湯と大浜少女歌劇団



明治45年(1912)、阪堺電気軌道(以下:阪堺電車)が乗客誘致策として、大浜公園に堺市(大浜)公会堂を建設し、大正2年(1913)には、コテージ風の潮湯と家族湯を新設しました。両施設は、明治建築界の重鎮・辰野金吾事務所の設計で、とても意匠をこらしたものでした。潮湯は、海水を沸かした浴場を中心とするレジャーセンターで、持病が和らぐと言われ、大人気施設となりました。大正13年(1924)には、大浜少女歌劇団が誕生し、4年後、劇場も新たに建設され、当時の利用客は1日数万人に上りました。しかし、昭和9年(1934)室戸台風で大浜公園が大破、少女歌劇団は解散し、大浜潮湯は昭和19年(1944)第二次世界大戦の戦況が悪化する中で営業を停止しました。

※注2 南海本線浜寺公園駅舎(登録有形文化財)の設計でお馴染みの近代建築の父。

大浜公園

136mの納涼大桟橋のたもとには3つの電気仕掛けの大噴水、

夜間にイルミネーションが輝き、その先には白砂のビーチ。

公園の周りには茶屋やホテル、料理旅館と最先端のアミューズメント施設が立ち並び、連日多くの客でにぎわっていた大浜公園の歴史をたどります。

古来より有名な景勝地であった旧堺港の南側にある大浜公園は、明治12年(1879年)に開園し、堺市では、府営浜寺公園(明治6年に開園)に次いで、※注1、2番目に設立された公園です。明治36年(1903)には、第5回国内勧業博覧会の会場となり、「仏蘭西式の庭園」と水族館が作られ、その後、海水浴場、土産物屋、料理旅館、公会堂、潮湯、歌劇団などが次々と整備され、春には潮干狩り、夏の日には海水浴客、夕暮れになると海に突き出した納涼桟橋が夕涼み客でいっぱいになり、秋冬には潮湯温泉が人気の中、中楽しめる大人気スポットでした。大正5年(1916)に作られたであろう地図には、茶屋と別荘地合わせて95棟もの建物が確認できます。また大正11年(1922)大浜に水上飛行場ができると、さらに多くの見物客が集まりました。しかし室戸台風と第2次大戦で大きな被害を受け、臨海工業地帯の埋め立てが始まると、リゾートとしての面影は徐々になくなりました。現在は屋外プール、体育館、テニスコート、相撲場、猿飼育舎、蘇鉄山などがあり、気軽に利用できるスポーツ・レクリエーションスペースとして活用され、毎年7月31日には、鎌倉時代から続く堺の夏の風物詩「堺大魚夜市」が開かれ、古式に則ったせりや鮮魚の即売などが行われています。

※注1 市営ではなく、公営公園

ふれる堺。

大浜公園のあゆみ



大浜公園が発展したきっかけ—— 第5回国内勧業博覧会

19世紀欧米では文化・産業振興を目的とした大規模な万国博覧会が盛んに開かれています。その光景を目にした明治政府は、明治10年(1877)国内の近代化を進める国家的イベントとして、内国勧業博覧会を開催し、第1回から3回は東京、第4回は京都で開かれ大反響を呼びました。明治14年(1881)の堺廃止以来、来訪者が減少し、活気を取り戻すことが必須であった堺市は、政官民が力を合わせて誘致活動を行い、その結果、第5回国博覧会で、大阪市天王寺が第1会場、堺大浜公園が第2会場(水族館)となり、見事誘致に成功しました。第2会場の水族館は、すでに公園となっていた堺の南砲台跡地に建設され、天井をガラス張りにして魚を見上げる水槽など、日本で最初の、本格的水族館として建設され、会期中(122日)80万人を超える来場者が訪れ、これを機に大浜公園は、様々な余曲折を経ながらも、臨海工業地帯造成が始まるまで発展することとなりました。